

□文献紹介□

難治性血管肉腫患者に対するパゾパニブの有用性

血管肉腫は稀な軟部肉腫であり、約半数は皮膚に発生することが知られている。治療としては手術、放射線治療の他、全身療法が用いられるが、予後は不良であることが多く、全身療法の選択肢はいまだ少ない。

パゾパニブは VEGFR-1, 2, 3, PDGFR- α , β , c-kit に対して阻害作用をもつマルチキナーゼ阻害薬であり、国内では悪性軟部腫瘍に対して保険適応となっている。悪性軟部腫瘍の1つである血管肉腫では、血管特異的受容体チロシンキナーゼの発現量が増加しており、血管新生阻害作用を持つパゾパニブが有用である可能性がある。以上の背景から、著者らは進行期血管肉腫患者に対するパゾパニブの有効性および安全性を検証する目的で、多施設共同第Ⅱ相、非盲検、単一群試験を実施した。進行期血管肉腫患者($n=29$)に対して、パゾパニブ 800 mg を投与した。主要評価項目として3か月の無増悪生存(progression-free survival : PFS)率、および客観的奏効率(objective response rate : ORR)、副次評価項目として全生存期間(overall survival : OS)および安全性を設定した。主要評価項目である3か月 PFS 率は 54.6% [95% 信頼区間 :

36.0, 82.9%] であり、下限値が事前に設定した閾値 (5%) を上回った。一方で、ORR は 3% であり、閾値を上回らなかった。Kaplan-Meier 法による OS の中央値は 69.8 週間 [95% 信頼区間 : 42.3, 106.7] であり、また、有害事象に関しては既知のものと同様であった。以上の結果より、血管肉腫に対するパゾパニブは、奏効率は低いものの、3か月 PFS 率は高く、病勢制御の観点から有用であると考えられると著者らは述べている。しかし、本試験では2つの主要評価項目の一方のみを満たした結果であることから、慎重な結果の解釈が必要である。

現在は血管肉腫に対する免疫チェックポイント阻害薬の有用性も注目されており、パゾパニブとの併用療法についての研究の実施も待たれる。

Thiebaud JA, et al. OER-073 : A multicenter phase 2 study evaluating the role of pazopanib in angiosarcoma. *Cancer* 128 : 3516-3522, 2022

(慶應義塾大学 兵頭 麻里)